

【報告者】 湯浅 創

【学年】 4 学年

【教科・単元名】 国語：一つの花

【実践内容】

「一つだけ。一つだけ。」と言った時、ゆみ子はおなかがへっていたらどうか。

～ 叙述をもとにゆみ子の考えを読みとる～

教科書のゆみ子とお父さんの別れの場面をたけのこ読みで音読する。

ノートに自分の意見はどちらかを書かせ、その理由を考えさせる。

児童の意見を聞く。 ・おなかがへっていた... 20人 ・へっていたわけではない... 16人

へっていたグループとへっていなかったグループでわけて討論をする。

へっていたグループの意見

- ・ お父さんが「みんなおやりよ、母さん。おにぎりを -。」といったから。(1)
- ・ それまでに何度もおにぎりをほしがったから。
- ・ ゆみ子が「ひとつだけ」と言うと、お母さんはいつも食べ物を与えていたから。

へっていないグループの意見

- ・ ゆみ子の「一つだけ。」という言葉に対してお父さんはコスモスをあげたが、ゆみ子はとても喜んだから。
- ・ 駅に着くまでゆみ子はおにぎりをぜんぶ食べてしまい、子どものゆみ子はおなかがへるはずはない。
- ・ (1)はお父さんの考えで、ゆみ子がおなかがへていることは証明できない。
- ・ 「ひとつだけ。」はお母さんの口癖をゆみ子が覚えただけで、おなかがへている合図ではない。
- ・ おなかがへっていたのならコスモスを食べているか泣き続けるのではないか。

討論をもとにもう一度どちらの意見だと思うか聞いた。

おなかがへっていた... 7人                      へっていたわけではない... 29人

討論から「へっていたわけでない」グループの意見の方が文章から根拠を見つけ出し説得力があったことを児童に伝えた。

【反省】

発問を「おなかがへっている」か「へっていないわけではない」かのどちらかとしたことで、討論の目的が明確になり活気のある授業になったと思う。また児童の意見も、叙述から考えられているものが多く、説得力のあるものも多かった。そのため、最初の自分の考えと、友達の意見を聞いた後での自分の考えが変化している児童が多かった。

この授業で、ゆみ子の「一つだけ。」という言葉は、単におなかがへっていて食べ物をもう一つほしいということではないことが分かったので、そこから、母親とゆみ子の「一つだけ」の思いの違いや、お父さんが一つだけのコスモスの花に託したゆみ子への思いなどを読み深めるような授業に発展させていきたい。

<参考文献> なし